阿弥陀佛論

千賀貞順

「史上の仏陀は釈尊のみである。釈尊の成道と入滅を契機として仏陀観が異常に展開したことは多くの仏教論書に論明されている。併し天竺論書を通じての傾向は釈迦弥陀の同体論か本迹論で結末しているが、それでよいのか。浄土教としてはつくされていないと云へる。大乗教に於て三世十方の諸仏を認める仏陀観の発達は一般に論ぜられているが、浄土教祖師に見られる釈尊の人格・生活に基く特異な展開が浄土教仏陀観として注意さるべきことが兎角忘られているのでなかろうか。

三世十方に仏陀を認めることが既に指方立相を意味するものと注意してよい。即ち法華経に「全国に於て依仏して寂滅あらん」と云い、常住霊鷲山、と共に及び余の住処に仏あり、とし、又首楞厳三昧に現意菩薩か世尊の寿命如何と問うに、釈尊は答うるに、東方荘厳世界の照明荘厳自在王如来と同年なり、首楞厳三昧力により荘厳世界に行き七百阿僧祇劫の寿命なり、而してあの如来は吾身是なりと三十五成道の仏陀に即して久遠実成の仏を立てる。更に涅槃経には西方四十二恒河沙を過ぎて無勝浄土あり、四浮提に化身を成ずるとあり、仏昇忉利天為母説法経には三千大千世界は一仏の所化なり、乃至八方の世界に仏あり、聞くべし、浄土の如き世界

あり……各仏は各し釈迦は我なりとあり。央掘魔羅経には十方世界の文珠訪問を説き、十方諸仏は釈尊の分身若しくは応化身としている。故に此等の経証によって大乗教徒は釈尊を以て或は諸仏の応身とし或は釈尊の本仏と見たもののやうである。ところが釈尊に基調して展開した即ち釈尊の人格、生活に即して純正な宗教的展開が阿弥陀仏として特に浄土教祖師の帰命されたのであろう。一般仏教に云うが如き阿因・弥陀等の無数の仏・浄土を投影する論理的な仏陀観の展開があり、浄土教祖師に依る釈尊を師主とする他方浄土の願王仏としての宗教的展開が弥陀一仏帰命の仏陀論として注目されている。この浄土弥陀仏論の示唆は早く大乗経に見られ央掘魔羅経には西北方に仏土あり、無量と名づく、仏あり無量寿仏と名づくと説いている。更に華厳経――光明――毘盧舎那仏――無量光仏？　法華経――寿命――久遠実成――無量寿仏？　光明（空間）無量、寿命（時間）無限――無量寿の光であるものが仏――阿弥陀仏――釈尊の縁起成道入滅を契機として釈迦弥陀一体論と共に釈尊に依り釈尊に即してこれを超えた弥陀願王仏が救済の主体となる。即ち智證円珍が講演法華儀に「法華寿量品に説く久遠実成は無量寿と名づく、法華経の本門は阿弥陀仏也」と明かし、この説を受けて親鸞上人は和讃に、「久遠実成阿弥陀仏、五濁の凡愚を憐みて、釈迦牟尼仏と示してぞ迦耶城には応現する」と釈尊の成道入滅を契機とした仏陀観の発達史上に宗教的に釈迦師主説が起り釈尊は救済主でない、大師主先覚者であるとは浄土教祖師を一貫する反省であり、釈尊に依りこれを超えた弥陀仏こそ願王救済主として帰命し、その記録が浄土正依経である。即ち大阿弥陀経には最勝第一なり、諸仏の光明の及ぼざるところなりとあり、浄土を説いて諸仏国中の雄なるもの、大なるもの、勝れたるもの、都なりと説いている。悲華経には弥陀の本生無諍念王は観音・勢至・阿因

等の諸仏諸菩薩の真実の親と説いている程で、浄土系聖典何れも等しく願王の救済を強調している。浄土教に関係ありと見られる楞伽経にも明に「前有法報仏化身及変化皆従無量寿極楽界中出」とも説いている。

浄土教祖師の弥陀仏信仰史はこゝに述べる要はないが、曇鸞大師が観念法門に般舟三昧は見仏三昧、仏立三昧と云はれて十方に見仏、即ち見弥陀三昧を説くとあるが、般舟三昧経は異訳四本ある中、大集経賢護分に仏滅五百年の一百歳の中に出づるとあるから西紀前一世紀頃即ち大乗仏教の始原に既に十方諸仏を認める三昧に入れ、十方に諸仏立すといい、その中一例として西方弥陀仏を仏立すと云う。導師は般舟三昧を見阿弥陀仏三昧として過・現・未阿弥陀三昧を以て見仏すると説かれているから明に弥陀仏が根本救済仏と帰命されたことが知られる。

浄土教祖師を一貫して注意されることは釈尊弥陀同体論であるが、釈尊の本体身であり、更に悲華経の如く根本親仏とするもので、浄土教としては釈尊は救済主でなく大師主であり、先覚者であること。弥陀一仏こそ救済主として釈尊に即して竜樹・天親・曇鸞・道綽・曇鸞を承けて法然上人の宗教的自覚による信仰史観である。

以上